

## 9—ああ 夜勤があけた

寮母・後藤富美代



夜勤は二人で当たり、午後五時より翌日の八時三十分までです。出勤したら、玄関前の観音様に、「今夜も皆さんご無事でありますように」とお祈りします。五時より夕食介助。それが終わると、洗濯物やオムツを各人のロッカーに収めます。五時三十分。看護婦より要注意者の状態報告を受けます。それと同時に火災についての注意事項三項目を二人で声を出して確認しあい、標示盤と消火器の点検をします。その後、東西のトイレの清掃です。七時からおやつを配ります。このおやつは夕食が五時と早いので、せめて手作りのおやつを出し、長い夜の淋しさをカバーして戴くため開所以来から続いています。「失礼します。おやつです」と声をかけて居室に入ります。「今日は何ですか」と聞かれます。「やせうま（郷土食）ですよ」。Aさんは「これがおやつのうちで一番おいしい」と嬉しそうに食べます。「なんだ、だんごか」と言う人や、「養命酒を飲ませて下さい」と言われる方もいます。おやつを助食していると、「もう田植えが始まっちゃうんな」と話しかけられます。向こう側のベッドの方で、ゴソゴソしは

じめます。娘さんからの便りを読んでくれというのです。こういいますと、いかにものんびりムードのように見えるかもしれませんが、東京の松寿園の大火災があってからは、夜勤者もはもうこうしたのんびりした気持ちにはなれません。内心はびくびく不安です。防火訓練も夜間、抜き打ちが今では普通となりました。次は、ある夜勤の時の羽田野幸子寮母の手記です。

### ほんものの火事だっ！

おむつ交換、おやつ介助、歯磨き（自分で歯磨きの出来ない入れ歯の方）がすむと、私たち夜勤者の夕食です。ほっとした瞬間、突然、頭上でけたたましい非常ベルが鳴り響き、二人とも同時に副受信機にはっと注目しました。東管理棟だと確認、一瞬、機械室、仏間、洗濯場が浮かぶ。二人は寮母室の消火器をもって東管理棟へ。「臭い、どこかが燃えているっ」。洗濯場の天井下からの煙が見えた。洗濯場だ、と思った。「こっちが燃えているっ」。煙と全く関係の無い方向で誰かが叫んでいる。

飛んで行く。浴場で威勢良く炎上する火を見た瞬間、驚きと恐怖で、後は何も分かりません。消火器の元栓を引き発射する。手は震え、ホースの先をしっかりと握ることはすっかり忘れていた。逃げ回るホースの先を必死で押さえる。火は消えた。隣の隣々舎夜勤者の三人を併せて五人で消したのです。後で分かった事ですが、ベルがなってから現場へ駆け付けるのが一分。消火は三十秒でした。

利用者の方には訓練だったことを、当直者から放送され、一応はっとしました。その時の当直者は施設長で、風呂場なら実際火を燃やしても安全だとお考えになったのでしょう。消火栓のホースのつなぎ方など再確認をし、休憩室へ帰りました。興奮は覚めず、食事する気にはなれない。訓練でよかった。でも、実際の火災発生を思うとき、夜勤の責任の重大さに身震いする思いでした。(羽田野幸子)

理事長は、警報の音を恐れずそれになれよ、職員もお年よりも冷静に行動する練習こそが大それた事、と言われます。お年よりには、「ここは最も安全な施設です。万一の場合でも寮母が命がけでお守りします」と言われますので、いよいよ身がひきしまる思いです。

### 深夜の作業

午後十時三十分より翌朝の午前四時三十分まで、交代で一人が三時間の仮眠に入ります。重症の方がおられる場合は仮眠をせず、二人でとびまわります。主な仕事はオムツ交換、尿介助、体位変換、水分補給です。

夜間オムツとポータブルトイレ介助を併用している方は十一人です。この方たちは、尿意の訴えがなく排尿間隔が長く、おむつを外すことを極端に不安がられる方々です。オムツがぬれていない時は、ポータブルトイレに座してもらいます。「オムツより気持ちが良い。ありがと

う」と礼を言われる方もいます。現在、排泄を訴えることのできない方と、病気のためオムツを当てている方は十一人です。私達はこうしたかたには特に、オムツがぬれたらすぐ換えるようにしています。五十人のお世話を二人の寮母がするので、まず、オシッコの出たのがわからない人を先に見ていきます。三十分以上ぬらさないために、オムツ交換記録表をつくり、三十分毎の時間帯に従って記入します。この表は、誰が見ても、排泄の状況がすぐわかるようになっています。オムツ換えにかかる時間は一人三分ほどですが、体位変換や水分補給をするのと五分位かかります。夜間、ねむれないで、私たちが回っていくと話しかける方もいます。ゆっくり腰かけて話を聞いてあげたいと思います。楽呑みの水を飲ませてあげながら、「ごめんなさい、いまは私一人だから後で話をしましょうね」とその手を握りますと、しっかり握り返します。

もう少し時間があればと思いつながら、「おやすみなさい」と枕灯を消します。もう次の部屋の方のオムツが心配になります。

### 寝たばこ返上

ヘルペスに苦しむKさんはオリーブ油を綿花にひたし、足につけています。寮母の足音がすると、「ウ、ウ」「イ、イ」と足の痛みを訴えるうなり声が高くあげます。近頃、精神的にも不安定です。整形外科で痛み止めの注射を打ったあと、すぐ、「もう一本打って下さい」といっ

たり、痛み止めの薬を自分で薬局から買い、病院の薬とその薬をつづけて飲むのです。「体をこわしますよ」と、看護婦が病院の薬を預かろうとすると、「他人の権限をとめることはできない、ぼくの薬を飲むのに何が悪い」と怒ります。

ナースコールでの要求もおおくなります。痛み止めの薬の要求に、「余り飲みすぎると体にわるいから」と断わると、「わたしをどんな人間と思っているのか、馬鹿にするな、園長をよべ、看護婦をよべ」と、はげしくどなります。

それにKさんはタバコを吸います。時どき手元がくるって、毛布や衣類に焼けこげをつくったこともあります。松寿園の火災をきっかけに、喫煙所を寮母室の前に設けました。

松寿園の火災を施設全体で話し合いました。するとKさんは、「タバコはやめます。私のために皆さんに迷惑をかけたらいけませんから」といって、タバコとライターを寮母室に預けました。しかし、日がたつにつれてイライラがひどくなり、かくれて、タバコを吸うようになりました。昼夜私達はこの部屋を一番注意しています。

部屋に入ると、タバコを吸っています。「Kさん、タバコはおいしいですか」。「ぼくは足が痛い時、タバコを一口、二口吸うと痛みがなくなるんです」。「じゃあ、吸い終わるまで、一緒にいましょうね」。足を軽くさすりながら話を聞きます。「足が痛い時は大変ですね」と、優しくいたわります。すると、「このタバコとライターを預かって下さい」と、私に渡してくれました。「Kさん、吸いたくなったらいつでも言ってくださいね」。「お願いします」と言

われるのです。

### さざ波は静まらず

現在、任運荘では五十人中、重度の痴呆の方は十九人、準痴呆の方十五人です。

夜、Yさんが廊下の手スリにつかまりながら、ヨタヨタと歩いて出ていきます。私をみると、「あっ、おばさん、助けておくれっ」と呼びます。「どっこも、真暗でわかりません」とふるえています。「ごめんなさい、電気をつけましょうね。さあ明るくなりましたよ、安心して休んで下さいね」。枕灯をつけますと、両手をあわせて、「おおきに、おおきに」と言われるのです。明かりを消して不安を与えたことを反省しました。

しかし、ゆっくり反省するいとまがありません。あっちでもこっちでも人影が動き、心をやんでいいる人たちの訴えは続きます。

県から、重度のボケで、異常行動のある人の数の報告を求められました。職員給増額の基礎にするためだそうです。しかし、ここには重度であつてもひどい異常行動はもはや見られませんが、だから、調査報告にはゼロと書くしかありません。ある精神科医が、痴呆老人に異常行動があるのは、世話する方に異常があるからだ、と言っています。もっともな言葉と思つていきます。

夜があけてくると、洗面介助や寝間着から普段着への着替え、オムツ換え、トイレでのおせ

わなどと、とても忙しくなります。

ボケさんのMさんは、せかすと排尿がとまります。心はあせるのですが、「さあ、もう少しね」とニッコリ笑っておせわします。Mさんも、「ホホホ、なかなか出らんわえ」と、のんびりです。

眼のまわるような時間ですが、お年よりの方から、「ごくろうさん、おつかれさん」の言葉をかけられると、みなさんご無事でよかったと、思わず頭が下がります。

しかし、よくよく考えると、感謝しなければならぬのは私です。不自由な体で晩年を生きるきびしさを、お年よりは身をもって教えてくださっているからです。